

FDS

Report vol.7

学生FDスタッフ活動レポート 2013

CONTENTS

はじめに	01
授業インタビュー	02
学生FDサミット 2013夏	05
しゃべくRits	09
これでいいのかパラ産	10
他大学交流	11
その他の活動	13
編集後記	14

編集スタッフ(2013年度学生FDスタッフ)

政策科学部 4回生	澤野 俊英	経済学部 2回生	青海 貴大
産業社会学部 4回生	田中 翔	国際関係学部 2回生	津田 彩花
文学部 4回生	谷本 未来	産業社会学部 2回生	岡田 早織
経済学部 3回生	森本 拓暢	産業社会学部 2回生	古角 敦史
経済学部 3回生	竹本 恭祐	産業社会学部 2回生	常念 鉄平
産業社会学部 3回生	築地 志穂	情報理工学部 2回生	池田 裕幸
産業社会学部 3回生	井上 範子	政策科学部 2回生	加藤 雄一郎
情報理工学部 3回生	吉田 一貴	政策科学部 2回生	劉 嘉碩
政策科学部 3回生	杉野 友哉	文学部 2回生	黒羽 深季
文学部 3回生	天野 伽映	文学部 2回生	寺畠 華奈
文学部 3回生	藤橋 里奈	文学部 2回生	田村 友里
薬学部 3回生	益田 静香	法学部 2回生	橋岡 美樹
経済学部 2回生	安本 貴士	法学部 2回生	浅海 智雅
経済学部 2回生	藤本 健嗣		

本冊子の刊行にあたって

この冊子は、教育開発推進機構が進めるFD活動に参加する学生FDスタッフと教育開発推進機構が協力し作成した冊子で、2013年度の学生FDスタッフ活動を中心に紹介しています。スタッフが取り組みを通じて得たもの、学生が大学や授業に対して感じていること、先生方が授業に対して持っている想い、授業への工夫を少しではありますが紹介しています。是非ごらんいただければ幸いです。

2014年3月 教育開発推進機構



+R 未来を生みだす人になる。

立命館大学

RITSUMEIKAN



はじめに



What's FDs?

政策科学部2回生
2013年度
学生FDスタッフ代表
加藤 雄一郎



学生FDスタッフとは

みなさんこんにちは、2013年度学生FDスタッフ代表、加藤雄一郎です。この度はこの冊子を手に取ってくださってありがとうございます。そもそもFDとは「Faculty Development」の略で、大学の組織的な教育改善活動を指します。そのうえで私たちの学生FD活動を簡単に述べるとするならば「大学教育や大学生活をよりよいものにすべくみんなで考え方行動していく」というものです。私たちの活動は学生だけで行うものではなく、学生・教員・職員の三者で協力しています。今年は夏のサミット、後期には2つの学生交流企画を行いました。具体的には次のページから始まる今年度の活動をご覧ください。

来年度も大学教育や大学生活を今よりもよくするために、私たち学生FDスタッフは真剣に、そしてもちろん楽しく活動を続けていきたいと考えています。

木野先生より

本学の学生FDスタッフの前身は2006年度に誕生し、2007年度から正式に学生FDスタッフとしての活動を開始しました。学生の視点で大学の教育を良くしようという学生主体のFD活動は当時まだ珍しい方でしたが、その学生FD活動を全国に広げようと2009年夏に始めた「学生FDサミット」はまたたく間に学生FDというムーブメントを全国の大学にもたらしました。2013年夏に本学で開いた第8回には実に453人の学生・教職員が集まり、他大学との交流を通じて「自大学にないものを学ぶ」とともに「自大学の良さを発見する」という貴重な機会となっています。大学生としての時機を有意義なものにしたいと思っている学生の皆さん、自らの成長のためにも一緒にやりませんか。

学生FDスタッフ担当教員 共通教育推進機構 木野 茂



2013年度は、本学学内での活動の活性化を目指して、産業社会学部の学生団体と組んで企画を実施するなど、これまでとは違った新しい試みにもチャレンジしてきました。

また2011年度から連続して今年も学生FDサミットを立命館大学で開催するなど、他大学との様々な交流を通じて、大学間の交流・学生FDの普及も進めてきました。

今後も学生FD活動のさらなる高度化と活性化を目指し、学生・教員・職員の三位一体の体制により、学内外で活発に活動していきたいと考えています。

教育開発支援課



授業インタビュー

授業インタビューとは?

各スタッフが受講した授業の中から興味をもったものを選択して、その担当教員に学生自身がインタビューする企画。その授業や教員の魅力に迫ります。



Interview

01

身边に感じることができる倫理学

授業名 人間性と倫理
担当教員 平尾 昌宏
開講学部 経済学部
インタビュア 竹本 恭祐

■授業内容

人々は「よく生きたい、幸福に生きたい」と考えているが、考えてみると不思議なことに何が「よい・幸福である」のかを分かっていない。ではどのような状態が「よい・幸福」なのか。そのことを考えながら、倫理学の誕生から始めて古典的な倫理学の基本的な考え方を学ぶ。

■印象に残った理由

授業では平尾先生が執筆されたテキストを使用するが、このテキストがとても印象深かった。というのも、倫理学という一見小難しそうな学問も先生のテキストを通してみると非常にわかりやすく、魅力的に感じることができたからだ。人が正しく生きるとはどのような状態なのかななど、様々な観点から倫理学を学ぶことが楽しい授業であった。

Q. 哲學を学ぼうとしたきっかけは何ですか？

A. 僕はもともと倫理学を専攻しようと思っていたわけではないんです。もともと哲学科というところに入りました。そこでは哲学と倫理学の両方を学ぶんです。この両者は授業では別々になっていますが、研究上切り離されて考えるものではないのです。それと授業でも時々言いますが僕はそんなに倫理学をやりたいと思ったことはありません(笑)
哲学は役に立つ立たないという観念を飛び越えたところにある学問で、一方倫理学は私たちが正しく生きていくためにとても大事なものです。なので哲学の授業のように(倫理学が)自由で楽しいとは少し違っています。倫理学を学ぼうとしたきっかけというより哲学を学ぶ上で倫理学も学ぶことになったという形です。

Q. この授業を通して学生に学んでほしいことはありますか？

A. 哲理について学ぶこと、考えることがいかに重要なことかについて気づいてほしいと思います。僕がよく言うのは生きていく上で重要な要素としてお金というものがありますがこのお金はもっていたとしても受け取ってくれるひとがないと意味がありません。商品とお金と交換するという一つの前提、約束事を成り立たせているもの、そして私たちが生きることを成立させているもの、それが倫理であるということを学んでほしいです。

Q. 学生に対して言いたい、思うことはなにがありますか？

A. 言いたいことというより学部の違いによって学生のあり方、考え方方が全く違うことに面白いと思います。経済・経営学部の学生にはなぜ哲学倫理学があるのかを説明することから始めますが、文学部の学生は哲学倫理学があつて当たり前という考えをしているのでその必要はありません。そういう根本的な違いがあるんです。

Q. 先生の考え方についてコミュニケーションペーパーを通して「それはおかしい」と異を述べる受講生がいますがそれについてはどうしていますか？

A. そのように意見を出してくれる人に共通していることは「納得をしていない」ということだと思います。ただ繰り返し納得していない学生に同じことを繰り返し説明しても根本的な解決にはなりません。そして人によって納得の仕方は違いますからたくさんの例、切り口を使って説明するようになっています。
コミュニケーションペーパーにわからなかつたと書く人もいますけど、逆に今日の説明でわかるようになりましたと書いてくれる人もいます。

Q. 今年から教科書を使い始めたきっかけは何ですか？

A. もともと学生からレジュメか教科書が欲しいと言う要望が多かったんです。僕はレジュメが放ってあったりするのは嫌ですし、たくさんの分量のレジュメを用意するのは大変だからレジュメは使いたくなかったんです。でも、学生側からどうしても形に残るものがないと心配だと言う声がとても多い。
のでもともと学生からのこのような質問が多いだろうな、と考えていたことに対する答えを用意していたんですが、それを本にまとめて教科書として使い始めることにしました。

Q. 哲學の魅力をどのようなものだと思いますか？

A. 好き嫌いにかかわらず重要なもののところだと思います。授業する側として考えると、倫理学は多くの人が自分とは縁遠いものと考えていますが、実際には生きていく上では避けることのできないものです。そのことを学生に気付いてもらうことでやりがいを感じています。

Interview 2

授業を通して新しい「自分」を見つける

授業名 フィールド調査法

担当教員 橋 健一

開講学部 政策科学部

インタビュー 劉 嘉穎

■授業内容

フィールドワークの主な調査方法(主に質的調査法)を具体的に紹介しながら、それらに関わる時代的な認識や倫理について解説する。いろいろなフィールドワークの手法とその歴史性を把握し、それらが抱える認識論的な可能性および限界と調査倫理の問題への理解を促していく。

■印象に残った理由

大部分の授業とは違い、先生が一方的に説明するのではなく、フィールドワークに関する解説を行ったのち、学生にワークシートなどを中心とした作業を求める授業であった。ワークシート形式の課題をとおして「自分をフィールドワークする」という機会をこの授業で得られ、とても面白かった。この授業に参加して、私自身もより多くの視点から物事を見られるようになり、実践的な能力、応用力も以前より上げられたと感じている。

Q. 今日「フィールドワーク」は様々な分野で当たり前のように行われるようになりましたが、なぜフィールドワークが大事なのでしょうか?

A. フィールドワークの根本は、主体的なものではなく、受身的なものです。そうした受動性のなかから、パッション(学びたいという情熱)が生まれます。自分がどこでフィールドワークをするとか何を調べるとかには主体性が関わるのですが、それはきっかけにすぎません。フィールドワークでは、自分の視点からではなく現場の人たち、つまり他者の視点を私たちは学ばなければなりません。そして、自分が見たり聞いたりしたことを別の他者に伝える必要があります。大学での勉強では、自分が勉強したいことを勉強するという自らの追求も重要ですが、それだけでは不十分であり、他者と関わり、それを誰かに伝えることも大切です。「自分を超えたもの」に、フィールドワークでは触れることができます。

Q. この授業を通して学生に学んではほしいこと、あるいは学生に意識して欲しいことは何ですか?

A. この授業で重視することは自分を見直すことです。フィールドワークをする際に、他者を理解するための技術を磨き、今までと違う自分を発見できるよう促しています。フィールドワークの手法を使って、自分自身をよく調べ、自分自身を開いていけたらよいと思っています。私たちは通常、自分の今までの価値判断でのごとを選んでいますが、それは今までの「自分」を何度も繰り返しているにすぎません。大事なのは、もっと自分を開くことです。いろいろな人と出会ったりいろいろな話を聞いたりするにつれて、自分自身が少しずつ変われます。「自分の中の新しい自分を見つけること」が、この授業で一番学生に意識して欲しいことです。



Q. 授業で困ることは何ですか?

A. 毎回授業中に提出したワークシートを評価することは大変です(授業登録人数は約300人)。もっと少人数で授業をできれば、一人一人に対してより丁寧な指導ができると思います。また、元々モチベーションを十分に持っていない学生に关心を持たせるか、ということも課題だと思います。「学び」のモチベーションを支える学生同士の「つながり」ができるよう、今後、様々な角度から働きかけていきたいですね。

Q. 自分の授業は人気のある授業だと思いますか?

A. 人気があるかどうかは大して気にしていません。授業に出た学生が、作業なり勉強なりをしたときに、前の自分よりは一歩進んだと思え、充実感を得ることができれば良いと思っています。

Q. 先生の学生時代で人気のある授業あるいは面白い授業はどんな授業でしたか?

A. (学問の世界で)有名な先生の授業は人気がありました。僕にとって面白く感じられたのはある先生の最終講義でした。先生が人生の中で感じた不安や不満、疑問などをどう捉え、それにどう答えを出してきたか、という話を聴きました。僕は学生時代に「学問」という枠が先にあると考え、自分はどのような「学問」に合うかばかり考えていました。しかし、その最終講義を受けて、最初に「学問」の枠があるわけではなく、先生が生きている中で「問い合わせ」を抱き、それについての自分の考えを深めることが結果的に「学問」につながっている、ということがわかりました。それから先生たちが「人間」に見えてきました。それぞれの先生が、人生の中で、どのような他者と出会い、そこから何に关心を持ち、どう自分自身の「学」を創り上げようとしているのか、そのような視点から先生たちの話を聞くようになったら、授業がもっと面白くなると思います。

Interview 3

統計を窓口に経済学を深める

授業名 経済統計I

担当教員 平口 良司

開講学部 経済学部

インタビュー 青海 貴大

■授業内容

統計の知識を学びながら、経済データを統計分析する手法を学ぶ。前半では雇用・物価・景気に関する実際のデータを説明して、後半ではそれらのデータを様々な公式を用いて分析する方法を学ぶ。経済統計のデータ処理の基礎を理解するとともに、経済データの見方・使い方についての基本を学べるので、自分で今の日本経済の現状を把握する力を身に着けることができる。

■印象に残った理由

経済統計の基礎知識や、経済データの見方・使い方を学ぶことで、受講後も自分でデータを集め、分析する力が身につくのでとても実用的な授業だと感じた。先生が授業で実演しながらエクセルの活用方法を教えてくださるので分かりやすく、学生を飽きさせない工夫がたくさんある授業だと感じた。

Q. 授業での工夫点は何ですか?

A. 授業中に意識していることは数学が苦手な人でも馴染みやすいように計算を極力避けて授業をするように心がけています。教室の前のほうに座っている学生に質問をして、説明した内容がしっかりと学生に伝わっているかどうか、先生の認識と学生の認識にズレが生じないようにしています。授業中に渡すレジュメを一部穴空き形式にして、重要な部分は学生自身に書いてもらうことでただ聞くだけの受け身の授業にならないように気を付けています。

Q. 先生が学生に戻れたとしたら何がしたいですか?

A. 英語の勉強ともっと友達のネットワークを増やしたいです。アメリカの大学に5年ほど留学していたのですが、本音での会話じゃなく表層的な会話しかできなかつたので英語はあまり上達しませんでした。英語の勉強は頑張っておきたかったです。学生生活でやはり友達のネットワークは大事です。他の人のとのネットワークは社会に出てからも重要になります。

Q. 経済学を学ぶ上で学生に意識して欲しいことは何ですか?

A. 今日の日本はアベノミクスや円高・円安、株価の上下など連日何らかの経済の情報がニュースで取り上げられています。そのおかげもあり今では一般の人々でも以前より経済に興味を持つようになりましたし身近なものになりました。学生の皆さんには自分で必要なデータを集めて分析し説明や判断ができる力を身につけてほしいです。



Q. 学生に一言お願いします。

A. 私は経済学の先生として伝えることは、経済に注目し自分で分析し判断できる力を身につけることと、他人の意見を丸飲みにせず自分で批判できるようになって欲しいです。自分で考えた意見を持ち、それを周りの人に誤解なく伝えられる力をつけることが大事です。先ほども言ったのですが、友達をたくさんつくって欲しいです。大学時代にできた友達はこれからの皆さんの人生で財産になります。また、友達から刺激を受けて自分を大きく成長させることもできます。そしてせっかくの大学生活なので様々なことに挑戦していく下さい。大学生の間にしかできないことを何でもいいので積極的に取り組んでください。

Interview 04

能動的な学生を育てる熱血講義

授業名 生体生理工学

担当教員 萩原 啓

開講学部 情報理工学部

インタビュア 吉田 一貴

■授業内容

五感、視覚・触覚などの基本を理解する。例として五感に刺激を与えたときの状態を主観的に記録したもとの客観的データとのつながりや、神経（自立神経・運動神経など）と心臓や呼吸などの結びつきなどを理解する。また授業では社会でどのように役立っているか、身近なところでどう使われているかなども盛り込まれているため人間と生体生理工学との関わりを意識しながら学ぶことができる。

■印象に残った理由

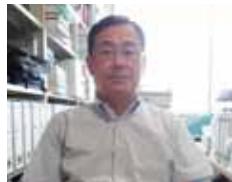
生体生理工学が社会でどのように使われているかを授業で教えてくださるので内容に興味を持つことができるとともに、将来のために意識を持って取り組もうと思える授業だと感じた。また、授業内容に興味をもたせる仕掛けや先生の学生に対する真面目な姿勢も魅力的であった。

Q. 授業での工夫点は何ですか？

A. 10分前には到着しチャイムとともに授業を開始するようにしています。学生だけでなく私自身も真面目に授業に取り組む姿勢をみせます。やっぱり先生が遅刻して始まる授業じゃ学生も「あれ？」って思いますよね。授業では流れを意識しています。最初にどういう内容をするかという全体像を把握してもらつてから授業で説明していきます。説明は学生の板書の速度を意識しています。また大事なことは何度も言います。レジュメは手を動かしてもらうために穴埋め式を用いています。また図やグラフにも書き込みをしてもらい理解を深めてもらっています。授業時間内に理解をしてもらうためにレポートは授業内で行います。

Q. どのような授業が理想ですか？

A. 学生が声を出せる授業。学生数が多いので現実には難しいが、先生が一方的に話すのではなく学生も声を出して参加するインタラクティブな授業が理想です。



Q. 授業を通して学んでほしいことは何ですか？

A. 理解を深めるためにどう使われるのか世の中でどう役立つかなどや未来について話したりして、授業内で考えるための材料は渡しているので知識だけではなく「それってどういう風に考えるのか」など、受け身でなく能動的に受けることを意識してほしいです。

Q. 学生に一言お願いします。

A. やる気がある人とのバラつきが大きい。頑張らないと夢は実現しない。「そんなんいいのか！」と思います。夢を叶えたいのあれば授業は真面目に受けないとダメです、真摯に取り組んでほしいです。何もやってない学生が心配です。どんなことでも興味を持っていることに積極的にtryしてほしい。サークルでもバイトでも、ボランティアでも、外国で見解を広めるもいい、自ら進んでやる。机上では得られない、いろいろなものを得て経験値をつんではほしい。ただし苦労してください。自分自身でやるのが大事です。受動的なのはダメです、積極的な人が伸びます。サークルとかなら会長や会計とかに自らなって欲しいです。最後に「真面目であれ！」

Interview 05

文系の「力」を伝える、学生視点の授業にせまる

授業名 京都学概論I

担当教員 須藤 圭

開講学部 文学部

インタビュア 黒羽 深季

■授業内容

京都は、それぞれの時代や人々によって、さまざまのことばをもって語られつづけてきた。こうしたことばから京都を見つめなおすことは、その地域を考える貴重な糸口を与えてくれるに違いない。京都を表現することばを具体的にとりあげながら、その諸問題について考えていく。

■印象に残った理由

今を過ごす京都が学問になる。そのことへのワクワク感が一番大きい理由であった。またmanaba+Rを使って学生の意見を集めながら展開される授業が魅力的だった。なぜなら「自分の意見が授業を作る」という前向きな感覚を得られるからだ。京都と向き合うことで自分への視点を持てたことが印象の残った理由である。

■本インタビューの目的

この授業を形作っているのは、京都出身ではない先生と、さまざまな場所で生まれ育った学生たちです。京都の「外」の人間たちが京都に関する授業を作り上げるという不思議さを考えます。また、文学部所属の先生に「文学部は本当に理系学部よりも劣っているか」という疑問をぶつけ、文学部での学びの本質にも迫ります。

Q. 京都の「外」の人間たちが「京都学概論I」という授業を形作ることに不思議な感覚はありませんでしたか？

A. 全然なかったです。この講義は対象が「過去の京都」です。たとえば、昔の祇園祭は今と全く違う目的や方法で行われていました。それだけでも今と昔は異なりますよね。そう考えると、みんな京都の「外」の人ですよ。それに、京都は誰のものでもないですからね。だから「外」や「中」といった概念は考えませんでした。「京都が千年の都ではない」と言い切ることもそうだと思います。現存する歴史的建造物のほとんどは室町時代後期以降のものです。それに平安時代の京都は今と全然違います。地理的には同じ場所ですが…もちろん、京都で勉強することがプラスに働くことはあると思います。ただ、今の京都を見て、平安時代の人も同じように感じていた、とするのは大きな誤りです。よく考えると突拍子のない発想ですが、そう思わせることが「幻想」です。京都に過度な期待をもつてしまう、それが面白いと思いますが、その反面、抑制しながら考える必要があると感じます。

Q. manaba+Rを用いての授業はなにか意図やねらいがあるのでしょうか？

A. 授業中に学生の意見をみんなで共有できるのがメリットだと思います。「すぐに意見を共有する」ことが大きいです。あと、90分は長いので息抜きの意味も含めて使っています。ずっと聞くだけよりはね。それに、コミュニケーションペーパーにその日学んだことを書いてもらっても知識止まりなので、自分がどう成長したかわかりません。僕は、授業後



Q. この力だけは理系学生にも負けない、と思う文系の「力」とはなんでしょうか？

A. 多角的な側面からものを見る力と、人のことを考える力ですね。

京都学や日本文学研究は様々な時代を生きた人間が社会をどのように考えて、問題に直面してきたかを考える学問です。江戸時代の紀行文には、眞面目に神社の由来が書かれている一方で「今日は雨だから出かけない」とも書いてあります。これは人間の二面性を表していますよね。一方では頑張り、もう一方では緩くなることは今の僕たちにもあると思います。それは、理系の学生が統計学を用いて正しいことを言ってきたとしても否定はできません。阿部公彦さんが10円の話をしています。高価なものを購入した後のおつりと欲しいものを買いたいときに不足している10円は異なりますよね。それは、私たちが10円にいかなる価値を求めるかで決まるからです。それを考えるためには、京都や文学について考えることを通して、その時代の人のものを感じ方を考えることが大切です。それは理系とは違った側面でものを見ることができ、大事なことを発見できます。「10円は100円の10分の1しかない」という事実に対して、「でも人間にとてはそうではない」と言えるし、言わなければならないのが文学部です。文学部生には「人間について深くなつた」「他人のことを考えられる」ことが強みだと思ってほしいですね。「理系は強くて文系は弱い」というのは間違います。ただ理系は「自分は強い」という幻想を持っていることが強みです。一方で文系は「自分は弱い」という幻想に取りつかれていることが弱みです。大学はたった4年です。その点からも優劣はないですよ。なので、理系コンプレックスだけは持てほしくないです。

■ 学生FDサミット2013夏 ~あなたとつくる

1日目

2013年8月24日(土)



オープニング

司会者はつらつとしたあいさつによって学生FDサミットが開幕。本サミットの趣旨を確認した。2日間に盛り込まれた各企画の概要や目的を、参加者のみなさんにはっきりとわかりやすく伝え、この後の企画が楽しみだと思えるような雰囲気づくりのためにも重要な場となった。

オープニング

10:30～11:00



新企画～学生FDの歴史と今を考える～

11:00～12:00



新企画～学生FDの歴史と今を考える～

変わりゆく学生FD界が今どうなっているかを考えることをメインテーマに掲げた企画である。それに関連して、今回のサミットを開催するに至った経緯や背景も紹介した。学生FDに関するクイズを織り込み、参加者に答えてもらいながら進行していく。新スタッフをはじめとしてベテランスタッフも含め、学生FDについて共通認識を持つことができた。

続いて、2013年3月に開催された岡山サミット時に各参加大学が作成した「学生FDタイムカプセル」の開封を行った。タイムカプセルにはそれぞれの団体の活動目標が書かれており、3月のことを思い出しつつ今を見つめ直し、達成できているかどうかを全体の場で確認した。立命館大学の学生FDスタッフも作成しており、この場で開封。「スタッフ数の増加」を目標に掲げており、具体的な数字としては「20人」。本サミット時には22人のスタッフが在籍しており、見事目標を達成していた。

本サミットでは多くの大学・団体に参加していただいた。特にその中で学生FD活動を始めたばかりの団体である、北翔大学「北翔アンビエント」、中京大学「Search」、岡山理科大学「とり.OUS」、京都光華女子大学「kokora」のそれぞれの代表者によって意気込みなどが語られた。学生FD活動の広がりを改めて感じることができたと思う。



新しいサミット～

ポスターセッション

「多様化する学生FDの中で、より他大学の活動を知りたい!」という声がきっかけとなった企画である。総勢51団体が発表者として参加した。発表者は事前に作成したポスターをもとに、自分たちの活動内容や団体の特色を紹介していく。参加者は自由にポスターを見て回り、発表者の発表に耳を傾け、適宜質問を投げかけるなどして、密なコミュニケーションを取りながら他団体の活動について知つてもらった。よりこの企画を楽しんでもらうために行ったのが、優秀なポスター製作および発表をした団体を決める「ポスター総選挙2013夏」。さらに、発表を一団体聞くごとにシールが1枚もらえ10枚以上集めるとご当地のお菓子がもらえる「聞いて貰おう!ご当地お菓子」。この2つによって他大学の活動を知り、交流を深める場がより楽しいものとなった。

ポスター総選挙の結果は

- 1位 関西大学 教育開発支援センター
ラーニングアシスタント
 - 2位 京都産業大学 学生FDスタッフ AC燐
 - 3位 大阪大学 パンキョー革命推進チーム
- であった。発表は、2日目のエンディングにて行われた。

ご当地お菓子は、参加団体に各地のお菓子を持ち寄っていただくことで数多く用意することができた。参加者からの協力を得ながらの企画であり、本サミットのテーマが色濃く現れていた。



ランチしゃべり場

12:20～13:40

ポスターセッション

14:00～16:30

懇親会

17:10～19:00



ランチしゃべり場

本企画は参加者同士のアイスブレイクを主目的とした場である。少人数のグループに分かれ、昼食を食べながらという気楽な雰囲気のもと、「あなたの学生FD歴教えてください!」というテーマに基づいて歓談した。学生FD活動を始めたきっかけや、最近の活動などを紹介し合った。学生だけでなく教職員も参加し、年齢や大学もバラバラな人たちが集まることで、新鮮な視点を発見することにつながった。

懇親会

参加された多くの学生・教職員の方々と交流できる場である。しゃべり場やポスターセッションで顔を合わせた人とさらに話を深めたり、交流のなかた参加者に積極的に話しかけたりと、他大学との交流の輪を広げる機会となった。話題は学生FDに関する事はもちろん、キャンパスライフについてと幅広く、各々が有意義な時間を過ごすことができた。

学生FDサミットとは…

「学生FD活動」をキーワードに、大学間の交流促進、学生FDの普及、大学教育について考えを共有し深めるために発足したイベントで、各大学の活動紹介や意見交換を主軸としている。毎回、全国各地から多くの学生や教職員が集結する。

2013年も8月24日、25日の2日間に渡って、立命館大学衣笠キャンパスにて開催された。参加者と共に新しい何かを作り出していく、という意味を込めて「あなたとつくる 新しいサミット」というテーマを掲げた。北は北海道、南は九州と、全国50大学から総勢約450人の参加者が集まり、非常に活気に満ちた2日間となった。

学生FDサミット2013夏 ~あなたとつくる

2日目

2013年8月25日(日)

オープニング

会場では2日目ということあって打ち解けた雰囲気ができつつ、さらなる意気込みも感じられた。

2日目のメイン企画、分科会についての説明と確認がされた。ここで説明された分科会とは、双方向性を意識した講義型の企画のこと。今夏は各分科会の運営を参加大学に担当していただいた。テーマ、内容共に各担当大学に全てお任せし、参加者が各テーマの中から一番興味を持ったものをそれぞれ選択して参加してもらつた。分科会は午前と午後で2部に分かれて行われた。



オープニング

9:30～9:45

分科会I

10:00～12:00

昼食

12:00～13:10

分科会I

分科会Iは主に学生FD活動において代表的な話題をとりあげた企画である。ここでは、大阪大学バンキョー革命推進チームより「大学教育の本丸へ突撃☆真夏の学生FD作戦会議」、東洋大学学生FDスタッフより「学生FD活動の大学間連携」、立命館大学学生FDスタッフより「解決!学生FDアンサー」というテーマでそれぞれ行われた。学生FD活動を長くしている人も始めたばかりという人も、それぞれの取り組みを振り返り、見直すきっかけとなった。また自治会や教職員といった別の視点からも意見が交わされ、学生FD活動の広がりを垣間見ることができた。



新しいサミット～

分科会Ⅱ

分科会Ⅱは分科会Iと重複しない限り自由なテーマで、より自由な発想で企画された。ここでは、追手門学院大学学生FDパレットより「学生FD再考」、関西大学科目提案学生委員会より「学生発案型授業の可能性と課題」、京都産業大学学生FDスタッフAC燐より「それでも僕は考えたい 学生FDへの『思い』」というテーマでそれぞれ行われた。学生、教職員が対等な立場で意見を交換することで、参加者が大学での学びについて高い関心を持っていることが感じられ、分科会での学びが各参加者のこれから活動をよりよいものとするきっかけになった。



エンディング

分科会担当大学に、分科会の様子・成果等を発表していただいたあと、サミットの様子をスライドショーで振り返った。ポスターセッションの結果発表も行われ盛り上がった。そして岡山大学i*Seeへの案内、次回の東洋大学サミットへの引き継ぎ、閉会のあいさつを行い、無事閉幕した。

分科会Ⅱ

13:10～14:40



エンディング

15:00～16:00



スタッフ感想

今回のサミットの特徴は、主催者と参加者が一体となってサミットを作り上げたことでした。ポスターセッションでは、各大学が取り組んでいることを一枚の模造紙にまとめて発表するという新しい取り組みが行われました。このプログラムを通して、立命館の団体だけでなく、食堂のおばちゃんを紹介するビデオをつくるなど、他大学の面白い取り組みをたくさん知ることができました。また、学生FDサミットといっても、FD以外の団体の方も多く参加しており、さまざまな角度から学校や教育の在り方について考える機会がありました。たくさんのこと学べるサミットです!ぜひ次は、みなさんもご参加ください!

国際関係学部 2回生 津田 彩花



しゃべくRits

2014年1月9日、衣笠キャンパス清心館527教室にて、
立命館大学学生FDスタッフ企画
「しゃべくRits」が開催された。

しゃべく
Rits

2014年1月9日(木)

学生個人がより充実した大学生活を送るためのしゃべり場企画である。学生の入学前と入学後の大学生活のイメージとのギャップに注目し、テーマは“学生が本当に求める授業や学生生活”。本企画のしゃべり場から得たアイデアや意見から、それぞれの大学生活の充実につながるヒントを見つけてもらうことを目的とした。

当日は一般学生4名に加え、教員3名、学生FDスタッフ6名が参加した。



18:05

しゃべり場

各グループに4,5人に分かれ、自己紹介からしゃべり場は始まる。A4用紙に手の形をペンでなぞり、その手形の5本の指と手のひら部分に名前や出身地を記入しそれぞれ発表し合う形式である。

自己紹介が終わり打ち解けた後は本編である。初めに入学前と入学後の実際の学生生活で感じるギャップをポストイットに複数書いてもらい、模造紙にみんなで貼り付けていく。次にそのみんなで書いたポストイット達を似ている物同士でグループニングしていく、そのギャップを解消していくためにどのようにしていけばいいのかという解決法をみんなで考えた。



18:50

グループ発表

各グループで学生参加者から報告者を選出し、全体で発表してもらった。各グループとてもよくまとめられていて、興味深い内容のしゃべり場が行われていたことがうかがえた。



《 感 想 》

大学に入ってから口癖のようにつぶやいていた入学前と入学後の学生生活のギャップを今学生FDに入ってから思いだし、こういった企画にできたことは本当によかったです。企画実現までには様々な困難もあったけれど、実際に企画を実施し、参加者のしゃべり場の様子や発表を見て、改めて達成感を感じました。大学生活におけるギャップはぬぐいきれないものもたくさんあるけれど、学生の意識から楽しく充実した大学生活を作り出すことができる、そして何よりも、こうして理想を語ることを忘れないという意識自体が学生生活の充実には必要不可欠だと、企画を通して実感することができました。

産業社会学部 2回生 常念 鉄平

これでいいのかパラ産～産社の魅力ってなんだろう～

2014年1月14日(火)：以学館25教室

チャラチャラしていて、遊び呆けている人が多くて、単位が楽にとれる…産社のイメージってこんなものばかりなの？！…そんな思いで始まったのが、本企画「これでいいのかパラ産～産社の魅力ってなんだろう～」である。今回は、「産社の魅力再発見！」を目標に、立命館大学学生FDスタッフとしては初となる、他団体との共催による学部限定の企画となった。



「パラ産」という言葉は「パラダイス産社」の略で、主にマイナスイメージで使われていることが多い。これは、実際に産社で学んでいる学生的自己肯定感を下げるだけでなく、これから産社で学びたいと思っている人の不安にもつながり「パラ産」という言葉が産業社会学部での学びに大きくつながっていると考えられる。

しかし、その一方で産業社会学部では、他学部、他の大学にはないような独特的な学びや、学部独自の学生FD活動や自治会活動も活発な学部でもある。

「産業社会学部の魅力をもっとみんなに知ってほしい！」という気持ちが、産業社会学部で活躍している団体と重なり、本企画が実施された。



企画では前半に各団体の紹介、後半にはしゃべり場が行われた。参加者は約20人となり、見学にいらっしゃる教職員の方々もいた。

前半の各団体の紹介では、産業社会学部自治会、自治会留学生支援団体SIS Boddy、エンター団執行部、産業社会学部デジタル工房D-PLUSの4団体が発表を行った。時間の都合で各5分ほどの発表ではあったが、各団体とも事前に練習を重ね、発表の後には拍手が起こった。その中でも、来年度から新たにできる団体である、自治会留学生支援団体SIS Boddyの周通さんには、発足に向けて団体の説明をしていただいた。これら団体の発表を通して、どのような団体が、どのような意図をもって活動しているのかを詳しく知ることができたと思われる。また、改めて産業社会学部にはいろいろな活動をしている団体があると気付くことができる内容であった。

後半のしゃべり場では「産社の魅力ってなんだろう？」をテーマに4つのグループに分かれ、産業社会学部の良いところについて、ポジティブな意見交換の場となった。同じ産業社会学部生でもそれぞれの班により、様々な意見が出た。

その中でも特に魅力として多かったのは、「学業」「施設」「団体」というカテゴリーの意見である。

「学業」においては、産業社会学部の特徴の一つである「アクティブラーニング」や「ダブルメジャー制度」を魅力に取り上げているグループが多くあり、各グループで好きな授業について話が盛り上がっていた。「『パラ産』と言われているけれど、案外学業の魅力が多くて驚いた」、「テーマパークについてや、マンガについてなど、周りからみたら遊んでいるように見えるから『パラ産』と呼ばれるのかもしれないけれど、私たちにとって社会で起きている全ては勉強の場である」という意見も出た。

「施設」については、5専攻ある産業社会学部ならではの特別な教室（子ども社会専攻のピアノ室など）や、D-PLUSを始めとするコンピュータ関連の充実度などが挙げられていた。そのほかにも、学部棟である以学館は、講演会などが行われる大きなホールがあることや、上から見ると立命館の「立」の字になっていることなども挙げられた。

「団体」については、他学部に比べ様々な団体があることが、魅力として挙げられた。産業社会学部では、学校にない施設やもっと自分たちに合う施設にするために独自の団体を作成する人が多く、そこから「積極的な人が多い」などという意見へとつながった。1回生の参加者からはエンター団の支援が印象に残っているという意見が挙げられた。エンター団によって「友達が多くできた」「時間割やレポートの作り方がわかった」等の後の学生生活に大きく関わっていることが伺えた。そのほかにも自治会や学部祭を主催するPPPなど、各団体の活動が、産業社会学部生の「明るい」「元気」などのパーソナリティーと関わっていると考える人も多くいた。



感想

全体としては、産業社会学部の良いところを発見・共有することで、自分たちのモチベーションが上がるだけでなく、ほかの人々に産業社会学部について紹介する際のきっかけにもなったと思います。今回の企画を通して、産業社会学部の魅力を再発見したことで、これから的生活をより良く過ごしてもらえることを期待しています。

また、様々な団体と協力して企画をした今回の経験を通して、団体間の横のつながりが強化されました。今回できたつながりを大切にし、これからも学生FDならではの視点で、学びに対するアプローチをしていきたいと思います。

産業社会学部 3回生 井上 範子

他大学交流

京都産業大学との交流会 立命館大学

2013年5月26日(日)



①お互いの活動紹介

両大学の代表が活動報告を行った。立命館大学は昨年のFDSレポートをもとに、分かりやすく1年間の活動を振り返った。京都産業大学は作成した映像を用いながらAC燃の魅力を面白く伝えた。入って間もない新メンバーは自大学の活動をより深く知れる機会となり、同時に、身近な大学の活動も知ることができた有意義なものだった。



②昼食・アイスブレイク

くじ引きでグループに分かれての昼食は、自己紹介も兼ねて気軽にお互いのことを知ることができた。ここでは京都産業大学の人と仲良くなれただけではなく、まだよく知らない立命館大学の人どうでも仲を深めることができた。どのグループも楽しく会話が弾み、このあとのミニしゃべり場へとその雰囲気を繋げた。

③ミニしゃべり場・発表

4つのグループに分かれて前半と後半2回行われた。時間はしゃべり場50分、発表15分。テーマは昼食時に話したい内容のアンケートをとつて決めた。「これええで!」という授業「日本で勉強するか留学するか」といった真面目なことから、「大学生活の不安」「人見知りを克服するには」というもの、さらには「どうやったら恋人ができるか」「好きなコンビニはどこか」という気楽なものまで様々であった。どのグループも自分たちに直結しているテーマで、次々と意見がでていた。また、大学ごとの違いなどを見つけて話を広げるなど盛り上がっていた。発表ではうまくまとめられなくて緊張したという声も聞こえたが、みんな上手だった。

④全体を通して

京都産業大学の活動は、各々が楽しんでやっていそうで吸収できることがたくさんあるように感じた。また、今回私は初めてしゃべり場を経験したが、自分と同じような考えを持っている人もいれば、全く違う角度から物事を捉えている人もいて、話がどんどん膨らんでいき非常に楽しかった。来年度もまたこの交流会に参加したい。

文学部 3回生 天野 伽映

同志社大学との交流会 同志社大学

2013年7月7日(日)

2013年7月7日に同志社大学で行われた同志社大学との交流会に参加了。同志社大学の方からの提案が実現し、非常に充実した交流会となつた。内容はお互いの活動紹介、親睦会をかねてのランチ、グループに分かれてのしゃべり場であった。



①お互いの活動紹介

まず、お互いの学生FD活動についての紹介があった。立命館大学は主に前年度の活動として、前期は全国の大学が集まる学生FDサミットの運営、後期はいくつかのグループ(職員企画、げすすび、ぱふろん、授業インタビュー、季刊誌作成、広報)にわかつての企画運営を行つたことを紹介した。同志社大学は一つのゼミ生が集まつて大学の学習改善を目指そうとした結果、グループ発足につながつたという経緯を紹介した。発足して間もないとはいえ、授業アンケートを行うなど活動はとても意欲的で刺激を受けた。

③しゃべり場

ランチの際に決めたいくつかのテーマについて、4、5人のグループにわかつてしゃべり場を行つた。「休学制度の利用」についてのテーマは、長期間の留学など自分のやりたいことのために大学を休学することは有益か、休学をしたまま目的を見失い大学を辞めてしまうことにつながらないかなどという意見が出た。また、「誰のためのFD活動か」というテーマについては、大学側からの働きかけで始まつた活動ではあるものの主体となるのは学生自身であること、これまでの様々な大学との交流を踏まえた意見などが話題として出された。全体としては、よりよい学生生活を送るために学生FD活動がどうあるべきかを再認識できたと思う。

②親睦会をかねてのランチ

同志社大学・寒梅館のカフェレストラン「Hamac de Paradis(アマーク・ド・パラディ)」にて親睦会をかねてランチをいただいた。活動に対するそれぞれの思いや、今後の活動についてなどを話しただけでなく、雑談を交えながらのランチで非常に盛り上がり、午後からの企画がより円滑に進むきっかけとなつた。また、ランチの終盤では、午後から行うしゃべり場についてそれぞれが話したいテーマを挙げ、共感の大きかったものを採用する流れとなつた。

④全体を通して

学生FD活動を進めていく際に、よりよいものを目指して精一杯取り組んでいたとしても、自身のグループだけではやはり限界があると思う。そこで今回のような他大学との交流会を行い新たな視点から学生生活を見直すきっかけを得て、今後の活動につなげることはとても意義のあることのように思う。全国の大学に学生FD活動が広まりつつある現在、こういった他大学との交流がますます行われるようになればと期待している。

法学部 2回生 浅海 智雅

第9回教育改善学生交流ワークショップ i*See2013

岡山大学 2013年9月15日(日)
16日(月・祝)

2013年9月15日・16日の2日間に渡って岡山大学にて開催された「第9回教育改善学生交流ワークショップ(通称i*See)」に参加した。本イベントは、「Learning & Teaching チップス革命!～主体的な学びのためのチップスづくり～」をメインテーマに全体議論・グループ議論がされていた。

①全体議論について

初日に行われた全体議論は「『主体的な学び』を引き出す、『主体的な学び』につなげるために」をテーマに5つの視点(受験勉強・履修形式・教材・授業形態・自学自習)から考えるというものであった。ただ、本イベントのメインテーマに出てくる「Learning & Teachingチップス」(以下チップス)という言葉に馴染みがない参加者に考慮し、全体議論の始めて岡山大学等のチップス集の事例を用いながらチップスについての説明があった。そのためチップスについて知識がなかった私でもスムーズに全体議論に入していくことが出来た。この企画の流れは、上記の5つの視点を一つずつ取り上げ、設定されたそれぞれの視点に関する話題で、数人で話し合い、そこで話し合ったことを基に全体で議論を行うというものであった。翌日のグループ議論に向けた下準備としての目的は達成されたのではないかと思った。

②グループ議論について

2日目のグループ議論は1日目の全体議論を受け、主体的な学びのためのチップスを実際に作成するというものだった。流れとしては、大学での学びにおける問題点や学習における困った点など、各自が学生の主体的な学びにつながっていないと考えることを列举し、その改善策をチップスとしてまとめ、出来上がったチップスを厳選しブラッシュアップして最後に今までにない新しいチップスを作るというものであった。私自身、大学での学びにおける問題点や学習における困った点をチップスという視点で考えたことがなかったのでとても興味深かったが、これまでにチップスを作ったことがなかったので戸惑いも少しながら感じた。

③報告会について

報告会では各グループで作られたチップスを参加者全体で共有する時間だった。今回出たチップスは、本当に多種多様なもので、その中には



私が思いもつかなかつたチップスやこれもチップスなのだというものがたくさんあった。

④全体を通して

イベント全体の印象としては運営がかなり余裕をもって行われていたなど感じた。もちろんイベントの規模にもよるが、1・2回生メインであるにもかかわらずこのように運営できるということは上回生のサポートや過去の経験がきちんと引き継ぎ出来ていることの現れだと思った。その面が素晴らしいと感じた。i*Seeは今回で9回目を迎え、テーマが今後どうなっていくか注目していく点かもしれない。何度もイベントを行うと設定するテーマ決めが難しくなるのは仕方ないことであるが、それをどのように打開していくかが大変になる。今回は主体的な学びをチップスという視点で考えるもので今までにはなかった視点で非常に興味深かった。

産業社会学部 4回生 田中 翔

第5回 学生FDのWA!!!!!!



追手門学院大学 2013年12月7日(火)
8日(水)

プロジェクトアドベンチャー

今回は玉川大学学術研究所准教授であり、心の教育実践センター主任代理も務める難波克己氏を外部講師としてお招きし、プロジェクトアドベンチャーについて体を動かしながら教えていただいた。

①フィンガーキャッチ

フィンガーキャッチとは、様々な縛りに則って相手の指を掴んだり、膝を叩いたりという動作を繰り返しながら相手と打ち解ける方法である。初対面の学生・教職員で行ったこともあって最初は遠慮がちにスタートした。初めは何度も失敗し、呼吸を合わせてやり直すこともしばしばあった。しかし、次第に打ち解け笑いが零れるようになり、その後のアクティビティに緊張することなく取り組めるようになった。

②自己紹介

自己紹介の仕方もユニークであった。「あだ名」ではなく「呼ばれたい名前」で自己紹介をする。目があつて、握手し、自分の名前を言うことを多くの人と繰り返した。その後、パートナーシェイクハンドに移行。「木こり」「釣り」「平和の薬を作る魔法使い」など、様々な条件を模した握手を行い、握手の間に自己紹介をするというもの。動きはオーバーで特徴的なものが多く、そのユニークさに笑いながら自己紹介をすることができた。

③大学紹介

「劇団五季」の名のもと、各大学に分かれて劇風に大学紹介を行った。椅子などの小道具を使ったり、歌を歌ったり、ポーズをとったりと様々な工夫が見られ、各大学の特色が現れる大学紹介となった。立命館大学は、学生FD創設の父である木野先生がいることをアピールし、大学紹介のトリを飾った。

④手型で自己開示

自分の手型を紙にとることからスタートした。手首に「呼ばれたい名前」、親指から小指の枠の中にそれぞれ、「親からよく言っていた言葉」、「周辺から言っている言葉」、「自分が思う自分」、「最近学んだこと」、「これから自分の自分との約束」を書き込んだ。最後に、手の甲の部分に「座右の銘/好きな言葉」を書き込み、4人以上の人とシェアを行い、コメントしあった。終了後、手型の外側に「人と関わる上で大事にしていること」を書き込み、シェアを行い、コメントしあった。積極的な自己開示が、親睦を深め、絆を作るために不可欠であると思った。

⑤人型に問題を書き込む

10人以上でグループを作り、模造紙に人型を取った。形は自由であり、個数も制限はなかった。人型の内部に「今、自大学が抱える問題や悩み」を書き込む。ふさわしいと思う位置に、自分で悩みや問題を書き込む作業をひたすら行い、問題を共有した。書いた悩みや問題について、簡単に話し合ったり、詳しい話を聞きあつたりしながら作業は進んでいった。それぞれの大学によってサポート体制や支援の状況が異なるため、共通点や相違点を見出すことができた。このアクティビティが2日目の問題解決法の模索に生きていく。

1日目はここで終了し、懇親会へ移った。なお、今回は日程の都合上12月7日のみの参加となり、解決法発見までたどり着けなかったことが残念でならない。

文学部 2回生 黒羽 深季

自治会と共に進める学生FDの新たな挑戦

～ゼミ通年4単位を半年2単位へ～

2013年度の後期に、ゼミ(演習Ⅰ・Ⅱ)が現在通年4単位であるのを前期2単位・後期2単位へ変更することを学部に要求した。五者懇談会で意見を述べさせてもらい、2016年度の改革としてその方向で進んでいるとの回答を得た。

問題意識として、現状の制度のままでは「留学に行きたいと少しでも思っている人がゼミのことも考えて留学をあきらめる可能性」、「留学に行くことを決めたが、ゼミでも学びたい。でも単位がもらえないならゼミに入らないでもよいと考えてゼミに入らない可能性」が挙げられる。「ゼミをやりたいんだけど」という気持ちをつぶすことになっている現在のシステムを変えるべきである。

通年4単位を前期後期2単位に分けることの狙いは大きく2つで、①留学を考えている人でも積極的にゼミに入るよう促す(1回生向け)、②留学から帰ってきた人がゼミに戻ることを促進(2,3回生向け)することである。1つ目は、1回生のゼミ選択の時期と交換留学(夏出発)の応募・選考の時期が重なっていることで、1回生は「ゼミに入ったとしても前期だけしかいられないなら入るのをやめよう」と考える可能性があり、実際にそう考えてゼミに入ることを断念する人がいた。たとえば、2回生の夏に留学に行き3回生の前期終了時に戻ってきた場合、ゼミへの参加は後期からになるが、やはり3回生前期が留学扱いになるので後期だけではゼミの単位が認められない事例である。また2つ目は、せっかく2回生になりゼミに所属したとしても通年4単位の状態では前期のみの出席では単位がもらえないことがわかつており、ゼミに出席するモチベーションが下がりやめてしまうことが懸念されていた。これも私の周囲に少なからずいた。

前期後期2単位にすることのメリットは学生、大学側双方にあると考えた。学生側のメリットは、ゼミで学ぶことと留学に行くことの両方を実現できる。また、ゼミに入りたいかも、留学に行きたいかも、という気持ちを後押しできることである。他方、大学側のメリットは、留学行った学生がゼミでも学び「幅広い経済知識と論理的思考によって現実の経済活動を分析できる経済学の素養を身に付け」ことができるであろう点にある。(立命館大学経済学部学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)より抜粋)。そのような学生が社会に出た時に、立命館の学生はよくできるな・素晴らしいなと思ってもらえるようなことがあれば、立命館の評判もあがるであろうし大学側にとっても喜ばしいことである。

学部側も認識していたであろう問題点を改めて提起することで、2016年度の教学改革での実現に近づく前向きな回答を得られたと考えている。この提案は、経済学部自治委員会の方々のご理解ご協力がなければ実現しなかったことであり、この場で改めて感謝申し上げます。

経済学部 3回生 森本 拓暢

立命館大学学生FDスタッフ Facebook更新中！

立命館大学学生FDスタッフは日々のミーティングや企画の様子をFacebookで随時更新しています。普段の活動の雰囲気はもちろん、大きなイベントである学生FDサミットや他大学との交流企画の様子なども掲載しているので、「学生FDスタッフって普段どんなことやってるんだろう?」と気になったらぜひチェックしてみてください！

次ページの
QRコードよりアクセスできます！



編集後記

今年から何か新しいことを始めてみたいと思い、FDスタッフに。前期中は理解が浅いままで指示される通りにサミットの準備をしていました。当日のオープニングで驚くほど緊張したことや、楽しんで学びについて考えられたことは貴重な体験でした。冊子の編集にあたり、自分が参加できなかったイベントや企画についても振り返る機会になりました。自身の活動での反省をふまえ、今後は積極的に活動に取り組んでいきたいです。



文学部 2回生 寺畠 華奈



「全国の学生と交流できる」というフレーズに惹かれて始めた学生FDスタッフ活動。夏の学生FDサミットでは大勢の学生や教職員の方々と交流する機会を得られただけでなく、400人以上の前に立って話すという貴重な経験もできました。後期に実施した2つの学内向け企画では自分たちで企画を立ち上げることの大変さを知りました。こうした活動を通して自身の成長を実感できた1年でした。立命館スタッフ一丸となって、今後も積極的に活動していきたいと思います。

文学部 2回生 田村 友里

学生FDでは、何もないところから生まれた学生の企画を、教職員の方のサポートの下で、すべて学生が実施してきました。学生生活の充実を求めて何も知らずに入った僕には、正直戸惑うことばかりでしたが、はじめに夏の学生FDサミットを経験し、その後学生FD活動に積極的に参加することでますます学生FDの理解が深まり、大学生の学びへの関心が深まりました。そして何より、積極的に企画に取り組むことで自分自身の成長と学生生活の充実を感じる事が出来たと思います。

産業社会学部 2回生 常念 鉄平



何か新しいことを始めたいと思ったのがきっかけで、今年度より学生FDスタッフとして活動していました。前期は「学生FDサミット2013夏」の運営に携わり、多くの大学の参加者と交流することで、学生FD活動が全国に広がっているのを実感しました。また後期は「しゃべくRits」「これでいいのかパラ産」といった大学内での企画を通して、自らの学生生活を見つめ直す機会に恵まれました。今後もスタッフの一員として活動に尽力し、学生FDのますますの発展に貢献できればと思っています。

法学部 2回生 浅海 智雅

学生FDスタッフ募集!!

学生FDスタッフでは、よい授業づくりや授業・教育を改善するための活動に興味のある方などを募集しております。活動は学生・教員・職員の三者で行っていて、ここにしかない経験もあります。興味のある方は是非お問い合わせください。また、定期的にミーティングも行っていますので、いつでもご自由にご参加ください。

皆さんも一緒に
学生FD活動を
やってみませんか?

対象 立命館大学に在籍する学生・大学院生

問い合わせ 立命館大学 教育開発支援課

【会場】有心館1F

Tel:075-465-8304 Mail:fd71cer@st.ritsumei.ac.jp

HP:http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/itl_fd/index.html

今すぐ
アクセス!





R RITSUMEIKAN

立命館大学 教育開発推進機構・教育開発支援課

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL:075-465-8304 FAX:075-465-8318

e-mail:fd71cer@st.ritsumei.ac.jp

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/index.html>